

夢のあとさき その6

学校の在り方で地域が変わると考えます。幼稚園や小学校から中学校そして高等学校までの学びの大きな道筋を持てば、この地域は、食の確保と生活文化の維持と温暖な気候と住みやすさというその立地条件を生かし、人が人を呼び、産業を生み、次の産業を創造し、世界の中で立脚できる土地になると思います。

ところで、そのように考える人的な階層は、いわゆる都会派ではなくて、地方派とでもいふべき山や谷や川や海や田園や森林や里山に思いを持つ地元民であるのかもしれませんが。いわばこの地に生まれこの地に育った思いを持つ人々であると定義できます。でもそうすると、今都会に置いて生計を立てている若者たちは、その郷愁が生活を上回る年代にならないと帰郷できない仕組みになってはいまいかと危惧するのです。

さて、教育機関に話を戻します。様々な刺激と文化的知識や機会に恵まれているとする都会での生活が準備する教育的な機関について考えると、やはり子供を育てるにおいて地方にはない仕組みによりすぐることの優位性は否めないとも思います。実際、中高一貫教育を受けた私立高校生が、東京大学への合格を多数勝ち取っていることは事実でもあるでしょう。

しかし、オタマジャクシがうようよいるぬるい田んぼの水に手を浸して、その一匹を掬い取り、実際に家に持ち帰って飼育し始め、日ごとに足が出る手が出ることを目の前にした喜びを持つ生徒を相手に様々な課題を克服する経緯を共にする喜びは、なににも代えがたいことなのではないでしょうか。

田んぼの中を走り回って、夏の草いきれのムツとする空気の中に、遠い空の入道雲を見ながらにわか雨を感じることや、赤く熟したトマトにかじりつき、染み出る果汁の甘さに驚いたり、のみやのこぎりを使って板を切り出し、時には傷ついた指先から噴き出る血をなめた記憶を共有することは、とても大切なことであると考えます。その共有があつてこそ地域で人材が育つのだと思います。

様々な人と出会いながら、その出会いを喜び、その遺志を引き継いでいくという大きな波ができることが今後の課題であります。

決して、自分の高校時代を誇らしげに語って、よき時代の郷愁に浸るのではなく、今の子供たちの目線で語り続ける世代でありたいと心から思います。今の子供たちが何を見て何を考えているかは、きちんと知らなければなりません。

子どもたちの心の動きをよく見てよく考えていないと、彼らの今後も共有できないのではないかと危惧します。彼らの未来を信じつつ彼らの心の動きに気を配ることができることが大人として大切な姿勢であると考えております。